

2025.1.15

都立戸山&お茶高理系女子育成連携プロジェクト「女性研修者にインタビューしてみよう」は、両校の生徒が組んで女性研究者にインタビューし、そこで得たものをまとめ、全校生徒に向けて発信するプロジェクトです。ここでは1年生2名2年生1名が2024年12月20日、東京大学の佐々木成江教授にインタビューした記事をご紹介します。

東京大学の佐々木成江先生は、一児の母の顔を持ちながら、生物の研究とともに、ジェンダード・イノベーションの研究に力を入れて取り組まれています。私たちがインタビューしてきた、先生のキャリアや、研究の内容についてお伝えします。

1. ジェンダード・イノベーションについて

①ジェンダード・イノベーションとは

ジェンダード・イノベーションとは性差を考慮して研究や開発を行うことで、そこから新たなイノベーションが創造されるという新しい概念のことです。佐々木教授はお茶の水女子大学のジェンダード・イノベーション研究所で2024年の春まで研究を行っていました。

長年、研究や開発において男性が対象や基準となることが多く、性差が見過ごされがちだったことがこの研究の背景にあります。例えば、サリドマイドを妊娠中に服用してしまうと、胎児に奇形が生じてしまうという薬害事件が大きなきっかけになり、しばらく女性は治験から外されていたのも一例です。女性を守るための対策ではあったものの、女性の健康に関するデータが著しく欠如してしまったことは、大きな問題です。ジェンダード・イノベーションでは、男女に差がある場合は、研究や技術開発を通して差を埋めるという公正という視点が重要視されています。このような考え方が、ジェンダーギャップの大きい日本の社会を変えていくことになるでしょう。

②どのように社会を変えていくべきか

上記のように、男女別でとった統計を分けずに一緒にしていたことなどが様々な問題を引き起こしているため、男女の性差を理解し、知識を整え、適切なデータを取る必要があります。

また、個人の経験や感覚ではなく数値化し、客観的に物事を見る姿勢が重要です。ジェンダード・イノベーションを広めることで、「平等(個人差は考えずにすべての人に同じものを与えること)ではなく「公正(個人差を視野に入れてそれぞれに適切なものを与えること)」な社会を実現することができます。

そして同様の問題は、障がい者のようなマイノリティにも生じます。ある集団が社会全体の3割を超えるとマイノリティではなくなります(クリティカルマス)。つまり、必要なのは数です。ジェンダード・イノベーション推進のためにも研究分野に加えて政治や経済などに参加する女性の割合を増やすことがとても重要です。

2. 先生のキャリアや仕事と生活について

①子育てのあり方について

日本では、女性が子育ての中心的な役割を担う割合が高いことが課題となっています。共働き家庭が増えて、男性が育児に参加する傾向になりつつも、実際は女性に負担が集中しているのが現状です。それは、男性の育児休業の取得率の低さや性別役割分担の固定観念などが原因であり、ジェンダーギャップ指数の低さに表れています。そんな現状に対して、佐々木先生は「女性(母親)もしたい仕事をあきらめなくていい権利がある」ことを主張しています。「子供を産む=キャリアを捨てる」になりがちな社会を変えたい。そんな気持ちを持ちながら創設したのが大学内の保育園や学童保育施設だということです。

研究者の場合、夜遅くまで研究に没頭するという働き方も珍しくなく、子供を持つと、仕事と子育てとの両立には難しさもあります。そのような状況を打開することに加え、女性特有の悩み(生理、妊娠、出産など)を共有する女性研究者が安心して働くために、お茶大に保育園を、名古屋大に学童保育や女性休養・育児支援室を開室したそうです。

日本の子育ては、もっと解放されるべきだともおっしゃいました。日本では、子供を育てるのは親の役目だと考えられていますが、女性活躍が進んでいるスウェーデンでは、ほとんどの人が子供は親ではなく社会

が育てるべきという考えを持っているそうです。

②子供は社会が育てるとは

子供が小さいときはお母さんが一緒にいてあげないとかわいそう、愛情が十分に注がれない、という考え方は今でも日本で多くの人が持っています。しかし、佐々木先生は、そうとも限らないとおっしゃいます。佐々木先生は、産後ご自分の研究にいち早く戻るために、育休を取らずに産休明けすぐに子供を保育所に預けました。先生は、子供に「今日も保育園に行けて嬉しいね」などと声を掛け、保育所を子供にとって楽しい場所にするよう心がけていたそうです。子供を預けることが悪だと思必要はない、保育士は子育てのプロで、子供も家庭では経験できない様々な楽しい経験ができると、おっしゃっていました。

③子育てとキャリアの両立ができる社会にするには

佐々木先生がこのように子育てと研究とを両立できた背景には、ご自身の努力はもちろん、所属してきた大学の子育てに協力的な環境がありました。まだまだ今の社会では、女性研究者が子育てをできる環境は整っていません。佐々木先生は、そのような子供を社会で育てる環境の提供を広めていくと、その環境にたくさんの研究者が集まってきて、その環境が当たり前になっていくとおっしゃっていました。キャリアも子育ても諦めず、自分の人生を歩むことができる、という認識をもっと広めていくことが少しずつ社会の変革に繋がっていくのだと思います。

④先生がジェンダーに関する活動をしようと思ったきっかけ

佐々木先生がお茶大で働いていたとき、教員全体の4割が女性でしたが、のちに名古屋大学に移ると女性教員は全体の3%しかおらず、お茶大の環境との違いに違和感を持ち、後輩たちのためにこのような環境を変えたい、と感じたことがきっかけだそうです。また、ジェンダード・イノベーションは先生のご専門の生物学を活かせる分野だったこともあり、この道に進んだとのことでした。

3. 私たちの感想

- 私は佐々木先生の「社会全体で子育てを支える」という考えに関心を持ちました。以前は、実の親が子育てをするのが当たり前で、シッターさんを雇う人は少数だったと思います。ですが、調べてみると現在では地方自治体などの様々な団体が子育て支援に手厚いことがわかりました。このような変化は女性が社会に貢献するための大きな手助けとなっていると思います。
また、ジェンダード・イノベーションという分野で日本のジェンダーに対する意識が、良い方向に向いているのは、佐々木先生のような女性研究者をはじめとした先輩女性たちが後輩のために声を上げ続けているからだと感じました。
- 男女の性差が見過ごされてきたことで引き起こされた問題を知り、この問題の深刻さを実感しました。今後このインタビューで得た知識を活かしていきたいと思いました。
- 子供を産んでも自分は自分の人生を生きるという姿勢や、ご自身で道を拓きながらそれを実践してきた佐々木先生に強い憧れを抱きました。自分が社会を変えていく、という高い志を持ちながら日々研究に取り組む佐々木先生の想いは私たちが引き継いでいかなければならないと実感し、今後の人生を考える刺激になりました。

佐々木成江先生、貴重な機会を
ありがとうございました。

